

思春期の子どもの変化に伴う家族の変化

教育心理学研究室 北 島 歩 美

Family Transitions with Puberty Change

Ayumi KITAJIMA

A family changes according to each phase of its life cycle. Puberty change seems to have an especially great influence on a family, which leads to the transition of the family itself.

This study attempts to seize the family transition with puberty change from a positive standpoint, by interviewing mothers who represent their families.

As a result, four points are to be indicated: 1) a lowering of cohesion; 2) changes in authority structure and the relaxation of control; 3) participation of father in the family; and 4) reorganization of couple relationship.

Moreover, it is suggested that although the family becomes temporarily unstable and falls into a critical situation during the above transition, it enters upon another stable phase thereafter. Companionship based on mutual independence characterizes the latter phase.

目 次

I. 問題と目的

II. 調 査

A. 被調査者

B. 手 続 き

III. 結果と考察

A. 結果の分析

B. 家族変化の様相

1. 凝集性の緩和

2. 権威構造の変化・管理の緩和

3. 父親の家族参加

4. 夫婦関係の再編成

C. 思春期の危機後の家族

IV. ま と め

I. 問題と目的

個人の人生についてライフサイクルの観点を導入したのは、E. H. Erikson (1963)であった。彼は、人生を8段階に分け、各段階から次の段階に移行するときに危機が生じるとした。家族精神医学の分野でも1970年代に入ってから、家族ライフサイクルの観点が生まれた。それは、家族成員の個人発達課題を越え、家族それ自体の変換をとらえるものである。

S. Minuchin (1974) は正常な家族を調査し、家族のライフサイクルを4段階に分け、基本的な図式を提示した。

彼は、家族をシステムとして捉え、家族発達のプロセスはサブシステムの構造の変化を含んでいるとした。また、S. L. Rhodes (1978) は、段階区分を提示するだけでなく、家族そのものの正常な発達過程で期待される発達課題と危機をあげている。

E. A. Carter & M. McGoldrick (1980) は、現代のライフサイクル論として家族の発達段階を6段階に分けた理論を提示した。家族成立の前段階としてヤングアダルトの時期を設定し、また、離婚家庭の発達段階を提示しているという点で現代社会を反映しているといえる。その中で、発達の主要な原理とは、家族成員の増加・出立にともなう家族システムの拡大、縮小、再編成を中心として記述されている。

わが国においては、岡堂 (1980)、佐藤 (1986) がライフサイクルの提示を試みているが、実証的な調査研究は成されていないというのが実状である。

本研究においては、思春期の子どもをもつ家族に焦点を合わせた。これまでのライフサイクル論を振り返ってみると、その発達上の変化の契機になるのは子どもの発達である (小此木 1982) と考えられる。子どもが思春期を迎える時期は、S. L. Rhodes (1973) によれば、「十代の子どもをもつ家族」と段階区分され、この時期の課題として友愛性の獲得をあげている。また、S. Minuchin (1974) は、「青年期の子どもをもつ家族」と段階を設定した上で、この時期はそれまでの兄弟サブシステムから離れ、その年齢にふさわしい自律性と責任を与えられる

べきであると述べている。E. A. Carter & M. McGoldrick (1980) も「青春期の子どもをもった家族」として、この段階を取り上げ、その発達的主要な原理として子どもの自立を内包した家族境界の拡大をあげている。

このように様々な理論の中で、思春期の子どもをもった家族というのは重要視されている。臨床的に見ても、思春期の子どもの変化というのは、極めて多面的な様相を呈し、それまで安定してきた家族にとっては無視できない存在になると考えられる。それまで十数年にわたって家族の懐の中で過ごしてきた子ども達の巣立ちの時期であり、また、家族外の価値観に子ども達が傾倒し始めるためと言えよう。

そこで、本研究の目的は、思春期の子どもが様々に変化していく時、家族はそれまでの家族形態などをどのように変化させていくかについて面接調査し、家族の変化の様相を明らかにすることとする。そして、この時期の家族が果たす課題について考察する。

II. 調 査

A. 被調査者

第1子が思春期(中学1年—高校3年)である母親44名を対象に面接調査を行った。母親を対象にしたのは、一般に、母親は家庭にいる時間も長く、家族全体の動きを把握していると考えられるからである。面接は筆者の知人の紹介、また、面接した母親の紹介によるものである。なお、対象となった家族は、東京近郊に在住の中流のサラリーマン階層が多数であり、両親の教育程度、子どもの教育に関する関心は比較的高いと思われる。各家族の職業・第1子の年齢などについては表1、2に示した。

表1 面接した家族の職業

父親の職業	人数	母親の職業	人数
会 社 員	29	主 婦	25
自 営 業	3	自 営 業	6
公 務 員	6	パ ー ト	6
会 社 役 員	2	音 楽 教 師	3
教 員	2	会 社 員	2
そ の 他	2	そ の 他	2
計	44	計	44

表2 第1子の性別・学年別の人数

		男子	女子	人 数	
中学	1年	0	1	1	14
	2年	4	4	8	
	3年	2	3	5	
高校	1年	7	1	8	30
	2年	11	1	12	
	3年	3	7	10	
		27	17	計	44

また、第1子を取り上げた理由は、家族にとって子どもの変化が衝撃的に映り、大きな意味をもっていると考えられるからである。

B. 手 続 き

面接は原則的に家庭訪問によって行い、了承を得て、その内容を録音した。面接内容は以下の項目からなる半構造的面接を行い、面接時間は30分—1時間30分に及んだ。

- ①家族構成について
 - a 何人家族か
 - b メンバーの性別、年齢、職業、学年
 - ②子どもの変化について
 - a 変化の時期
 - b どのような出来事からそう思ったか
 - ③家族の変化について
 - a 家族のなかでの変化、エピソード
 - b 役割の変化
 - c 家族同士の心理的距離の変化
 - d 家族の変化についてどう感じているか
 - ④自分の家族について
 - a 現在の家族をどのような家族だと思っているか。
 - b 家族生活の中で、大切にしているものはなにか。
- 面接においては、具体的なエピソードを重要視し、できるだけ家族全体の動きを把握するようにつとめた。また、おもに核家族に焦点をあてて面接を行った。家族のライフサイクルを扱う場合まず、核家族の発達過程を定式化することに意味があると考えたからである。

III. 結果と考察

A. 結果の分析

面接結果を逐語録に直し、その中から、「家族の変化」に関する事項を抽出して、家族の変化について共通性の高いものからまとめる方法を用いた。さらに、各々の家族について、個別に事例的、臨床的に考察することを試みた。

B. 家族の変化の様相

家族変化の様相については、1.凝集性の緩和 2.権威構造の変化・管理の緩和 3.父親の家族参加 4.夫婦関係の再編成、と4つの側面から捉えることができた。

1. 凝集性の緩和

第1の家族変化として、「子どもが家族旅行に参加しないことを許容する」「子どもが家族から離れて過ごすことを認める」「家族全員で集まる時間がもてなくなる」などの変化があげられ、それらについて報告している家族は25家族(56.8%)にのぼった。これらの反応内容は表3にまとめた。

表3 凝集性の緩和を示唆する表現

子どもが自分自身の世界を大事にすることを認める。	のべ人数
自分の趣味に没頭することを認める。	2
様々な社会集會に参加することを見守る。	1
自分の部屋で長い時間過ごすことを認める。	1
子どもの都合で、家族旅行の機会が少なくなる。	
子どもが行くのをいやがるのであきらめる。	6
学校・部活動の都合があつて、仕方ない。	3
家族との旅行より、友人との時間を優先する。	1
子どもを置いて、夫婦で旅行してしまう。	1
家族全員が集まる時間がもてなくなる。	
以前は、休日は家族で過ごしていたが、それぞれで過ごすようになる。	6
子どもは、友達と遊びに行くことが多くなる。	4
食事の時間が、バラバラになる。(塾、部活動)	2
子どもの課題(宿題、テスト)が多くなり、休日は出かけられなくなる。	1
母親自身の外出が多くなる。	
友人達、夫婦での外出の機会が増える。	3
子どもの手が離れたので、働きに出るようになる。	2

子どもは思春期を迎え、家族よりも友人関係に重点をおき、部活動への没頭などで家族とは別の時間をもち、より自分自身の世界を大切にようになる。その結果、子どもを含めた形で家族がまとまって行動することは難しくなっていく。D. H. Olson (1979) は、家族員が他の家族メンバーに対して抱く情緒的結合と独立性の度合いのことを凝集性と定義したが、それに従うと、以上の変化は情緒的結合を緩め、独立性を高めるという点で、凝集性の緩和と呼ぶことができるだろう。すなわち、子どもが家族から距離をおくことで、それまで抱いてきた家族全体の情緒的結合も失われる。そのことを家族は受容していなくてはならないと言える。

H. Stierlin (1973) は、青年期の子どもが家族から分離する際に、家族に働く力は2つあり、一つは求心的パターン、他の一つは遠心的パターンであると述べている。前者は家族成員を家族の境界の内部に「しっかりと結び付け」青年を家族から分離するのを遅らせる力であり、後者は家族の結合力を弱め、青年をより外の社会(友人仲間など)に押し出す力である。今回の結果にこの概念をもちいれば、家族発達の中では、この時期は、家族がお互いに結びついた(求心的な)状態から、家族同士の距離が遠くなる(遠心的な)状態に移行すると考えられる。そして、この課題に失敗したとき、家族は遠心的な力を組み込んだ新たなシステムを確立できずに緊張状態に陥ると推測できよう(事例2)。ゆえに、家族の相互の親密性を適度に維持しつつ、凝集性を緩めていくという課題の解決をこの時期の家族は求められるとすることができる。

以下、凝集性のテーマに焦点をあてて、事例をあげる。

(事例1) 家族成員：父親42才(会社員)
母親38才(主婦)
長男15才(中学3年)
長女12才(中学1年)

以前は家族全員で日曜日には必ずテニスにいらっていた。しかし、長男は小学校6年の時に野球に興味をもち、少年野球に入ってしまった。下の子は、中学の夏休みまで父親にテニスを習っていたが、友達と過ごす方が楽しらしく、休日は友達と一緒に買い物とか、文化祭に行ったりしている。結局、現在は休みの日は夫婦2人でテニスをしている。母親自身は、「これからどんどん一緒には行動しなくなるだろう。高校にいったら、旅行にもついでこなくなるだろう。」と語っている。「寂しいけれど、子どもは子どもで成長しているからしかたない。」と、家族の変化については受けとめようとしているようである。

この家族では、家族の共通の関心であり、話題であったテニスに、子ども達は関心を示さなくなる。以前は休日の度に一緒にすごしていた家族が、徐々に別々の時間、別々の世界をもち始めているといえるだろう。しかし、この家族では急激な遠心的なパターンは起こらず、ゆっくりとした変化を遂げている。これは、夫婦の絆が固くとりあえずそこを中心として凝集性を緩めていけるからだと考えられる。

(事例2) 家族成員：父親47才(会社員)

母親47才(主婦)

長男17才(高校2年)

次男15才(中学3年)

母親によれば、長男は小学校の高学年の時に突然親から離れてしまったということである。今は、子どもたちは自分達の世界をそれぞれもっていて、両親とは距離をおいている。しかし、母親は子どもたちに自分の気持ちをわかってもらいたいから、一方的にワーと話す、子どもたちには受け取ってもらえない。その結果、母親が一人でエスカレートしてしまって家中が台風のような。しかし、母親はもうなにも手出しはできないと感じている。「子どもはすぐにいなくなってしまう。だから、大事にしたい。でも、現実には厳しい。」と母親は語っていた。

この家族においては、情緒的結合が失われるのを母親はかなりストレスに感じているようだ。母親は、離れていこうとする子どもたちに近づこうとするが、子どもたちは反発してうまくいかず、母親の無力感も顕著である。家族に遠心的な力が加わったまま平衡状態がつかめない危機的な状態であると言える。

2. 親子間の権威構造を変化させる。子どもに関する管理・規制を弱める。

第2の家族変化として、親のもとに子どもを服従させるようなそれまでの権威構造を変化させ、きつい管理の枠を緩めていくという変化があげられた。権威構造の変化、管理の緩和とともに、親と子の力関係を指すという点で共通していると言えるだろう。それらの変化の報告があったのは、合わせて25家族(56.8%)であり、その表現は表4にまとめた。

子どもが思春期を迎え自律性が高まってくると、自分自身の主張を通すために、家族の権威(父親がたてられることが多い)に反発することが多くなる。それに伴い家族は一時的に危機的な状況に陥るが、家族が再び安定を手に入れるには、権威構造(家族内の決定権の優先順位)を変化させることが必要であることが示唆された。

しかし、子どもが、家族の権威に反発するということ

は、それまで家族内で維持してきた権威秩序を乱すことになり、家族は非常なストレスを体験することになる。そして、何度かの衝突を経た後に家族が示す変化は「子どもを人間として認めていく」(2家族)「権威を振るわないで子どもの意見にも耳をかす」(2家族)など「親—子という縦の関係ではなく、より対等な関係への変化」と要約できるだろう。一方、子どもの自律性が高くなっていくにもかかわらず、依然として親の権威で押さえつけるなど、権威構造に変化が生じない場合、家族内の緊張は高まることも示唆された。

表4 権威構造の変化・管理の緩和を示唆する表現

権威構造の変化	のべ人数
父親と衝突するが、父親の方が子どもを一人の人間として認めていくようになる。	2
権威をふるうだけでなく、子どもの意見に耳を貸す。	2
父親と敵同士ようになるが、父親はそれを通して、子どもをより大きな視点から捉えられるようになる。	1
親の方が、欠点などを明らかにしてしまい、取り繕わない。	1
子どもの反抗に親のほうが、引き下がっていく。	1
管理の緩和	
何事も決めるのは本人に任せるようになる。	4
勉強しろと言わないようにする。	3
生活に関する細々としたことを言うのをやめる。	3
話し合っ、制限を緩める。	2
帰りが遅くなることを許す。	1
テレビを自由に見させる。	1
過干渉しないようにする。	1
枠の強い父親を母親が説得する。	1
「～しなさい」と言わないようにする。	1
制限を緩めるにあたって、どこまで緩めればよいのか迷う。	1

また、子どもは、この時期、親の判断に頼ることなしにいろいろなことにチャレンジをする。それに伴い、家族はそれまでの家族のルール、管理の枠を変化させていく必要があることも示唆された。例えば、子どもが友人と過ごす時間が増えていく時、門限の変更などが必要となってくるだろう。このことは特に母親の側に忍耐を要する。なぜなら、子どもは自律性を獲得したといっても大人から見ると十分ではない。「みていてイライラするけれど、もううるさいことは言わない」「この子に任すしかないという意味で心配」という報告もあり、そのことか

らも母親の迷いが見て取れるだろう。

以下、権威構造の変化、管理の緩和についての事例をあげる。

(事例3) 家族構成：父親49才(公務員)
母親47才(パート勤務)
長男17才(高校2年)
次男14才(中学2年)

高校に入ってから長男は反抗が出てきた。高校1年の時父親と対立した。母親は一時期父親と長男を二人きりにしておくのが心配だったという。父親は昔気質の人で、「子どもなんかに絶対負けられない」と言っていた。しかし、1年生の夏休みを迎える頃になると父親の方が「あいつが息子だと思っから腹がたつけれど、人間だと思っ腹もたたない」といって切り替えたとのことである。母親は「葛藤しているうちに親も目覚めた。峠を乗り越えられたのは親の方が切り替えたというのが大きいだろう。そのうち、子どもも『親も年だな』という気持ちが出てきて乗り切れるだろう。」と落ちついた様子で話しをしていた。

この家族は、父親に対する反発がでてきたが、葛藤が頂点に達したところで父親の方が考え方を切り替え、危機を乗り越えていると言えるだろう。

(事例4) 家族構成：父親44才(会社員)
母親42才(音楽教師)
長女13才(中学2年)
次女10才(小学5年)

母親によれば、長女は中学に入ってから生意気になったという。テレビの時間を制限したり、親が買わないといったものは絶対に買わないというのがこの家のルールであったが、それに対して長女は「なんでうちばかり」と涙を浮かべたりする。母親自身「今まで泣くまで反抗したことなんてなかった」と戸惑っている。父親がだめといったらだめなので長女は「お父さんは物わかりが悪い」と不満げである。行動範囲は広がってお金の使い道も広がってきている。「どこまで許すか難しい。あまり厳しくしすぎてうちにこもってしまっても困る。」と母親は思案中の様子であった。

この家族は今までの管理の幅では収まらなくなっている。長女の行動範囲の拡大に伴い管理の緩めることが必要となってきたが、母親の方ではどこまで緩めて良いかについては困惑している様子である。その時、父親の助けがない場合などは、母親はストレスを一人で抱え込むことになる。その結果、逆に管理が厳しくなったり、家族の葛藤が大きくなったりすることも示唆された。

3. 父親の家族参加

思春期の子どもをもつ家族の第3の変化として、父親の家族への参加、あるいは参加の要望があげられた。それらの内容は、表5にまとめた。44家族中34家族(77.2%)から報告が得られ、この時期、父親の在り方が重要な意味をもっているといえるだろう。

表5 父親の参加を示唆する表現

より高次の社会的観点から子どもと捉え、家族内から社会へと導く案内人として機能する。	のべ人数
父親は進路などの選択に積極的に参加するようになる。	3
甘い父親から厳しい父親になり社会的なルールを子どもに教えていく。	2
父親は子どもに自分の仕事の内容を教えていく。	2
父親の生き方を子ども達に教えていって欲しい。	2
父親が子どもに勉強する意味を教えていく。	1
男性役割を息子に教えていく。	
父親は長男と趣味を通して共通の世界をもつようになる。	3
父親と息子の結びつきが強くなる。	3
父親は長男に家庭内の男性役割を教えていく。	2
息子のことは父親に下駄を預けた。	1
これからは、父親に息子を育てていって欲しい。	1
家族のまとめ役として存在する。	
父親の介入によって、母親と子どもの葛藤が収まる。	4
父親にいざというとき前面にでて母親の援護をして欲しい。	2
父親に子どもを叱ってもらおう。	2
父親は、子どもの変化に対して戸惑う母親を助ける。	2
家族の中が台風のようになるのを父親に抑えて欲しい。	1
父親は、子どもをそうっとしておくように母親にアドバイスをする。	1

子どもが思春期以前の段階では、母親を中心に家族がまとまっていることが多く、どちらかというと父親は「蚊帳の外」であり、対外的には「企業戦士」であるようだ。

しかし、この時期になると、父親が家族に積極的にかかわらざるをえなくなったり、母親の側でも子どもの成長、変化に対処しきれずに父親の登場を願う声が多かった。父親がこの時期の父親の家族参加の意義は、以下のようにまとめられる。

①より広い社会的観点を家族の中に持ち込み、子ども

を家族内から社会へ導く案内人として機能する。

②男子の場合、男性の性役割を教える。

③家族の中にまとめ役 (keystone) として存在し、家族の葛藤が非常に大きくなるのを防ぐ。すなわち子どもの変化に対して動揺する母親を助けていたり、ストッパーとしての役割が大きくなる。

以上のことから言えることは、父親は単なる子どもの遊び相手としての意味をもっているわけではないということである。男性像、社会への導き手としての質的な変化を求められているといえる。以下に、父親の質的な変化を示唆している事例をあげる。

(事例5) 家族構成：父親43才 (会社員)

母親43才 (主婦)

長男17才 (高校3年)

長女15才 (中学3年)

長男は中学の時学校でいじめに合い、転校する。転校してから、長男は休日にはいろいろな集会に参加するようになった。勉強はしないし、それまでの生き立ち全てを疑い始めたということである。母親は非常に心配だったが、「そのようなとき父親がいて本当によかった！」と述べている。オロオロする母親に対して、父親は「良い子じゃないか」「暴力もないし、おとなしいほうだ」とゆったりと構えていた。母親によれば、以前は「子どもが子どもを育てているような、ただ子どもをかわいがる父親」であったが、最近は社会のこととかを長男に話しているという。長男も「どうやったら、自分の夢を現実化できるか」ということを考えているらしい。

事例にあげたように父親の役割は大きいといえるが、一方、父親の方もこの時期仕事が多忙になってくる。家族に関われる時間は少なくなり、社会的にも相当のストレスを背負い込むことになる。子どもが家族から距離をおくのと時を同じくして、父親も家族からの距離が最も遠くなる時期だといえるだろう。

そのような状況下で母親は父親をどうにか家族の中に引きずり込もうと努力する。家族で話し合いの場をもったり、わざと父親と子どもだけの場をつくったりと様々な試みをする。以下に事例をあげる。

(事例6) 家族構成：父親40才 (会社員)

母親40才 (パート勤務)

長男15才 (高校1年)

長女13才 (中学1年)

父親は非常に厳しい人で、怒ると大きな声を出す。母親によれば「他の家族は緊張して背筋をのばしていなくてはいけない。」とのことである。父親は仕事が忙しくほとんど不在であるが、父親が帰ってきて子ども達は2階

の子供部屋にいてしまう。母親自身は子供達に関する大体の状況は把握しているつもりであるが、長男に関しては男の子ということもあってよくわからない面が増えてきている。また、長女も父親に対して「帰ってこなくてもいい」と言い出した。そのため、母親は家族全員で話し合う場を設定し、父親のその場への参加を強く求めた。そこでは、長男が父親に抱いている批判、また、長女は母親の味方であることなどが話されたという。それに対して、父親も「家族のことは大切に思っている」と受けとめていた。母親は「子ども達も父親の考えていることがわかってよかったと思う」といっている。

この事例では父親不在のため、子供の変化に対して不安を感じた母親がかなり意図的に話し合いの場をもっている。それでも、父親の協力が得られない場合、母親は一人で子どもの変化・家族の変化に耐えていかななくてはならない。このことは母親の父親に対する失望を生み出したり、母親を喪失感、絶望感に追い込むこともあると考えられる。

木谷ら (1986) は、P. Blos (1967) の第2の個体化過程に関連して、

①父親の出現は、母一子の強い結合から子どもを分離し、さらに母親自身の分離にとまらなう不安を支える。

②父親の出現はより現実の視野の広がりをもたらす。安定した内的対象となり、規範 (厳格さ) としての側面に加えて、案内 (将来の展望) としての超自我の機能が拡大される。

と述べている。

今回の結果は以上の父親役割と一致している。しかし、現代のわが国の状況では父親が家族に関わるというのは時間的に非常に困難であることも面接から明らかになった。だからこそ、父親役割の重要性が大きく取り上げられているといえるであろう。

4. 夫婦関係の再編成

第4の家族変化としては、夫婦関係の再編成があげられた。18家族 (49.9%) から夫婦関係の変化について報告されており、それらの表現は、表6にまとめた。内容は以下のように大きく二種に分けられた。

①子供の変化 (反抗、離脱) を通して、夫婦が一致団結する。

②夫婦それ自体の結びつきが強まる。

①については、子どもの変化 (分離、反抗) に対して、夫婦の間で話し合ったり、情報交換したりすることを指す。先に触れた「父親の重要性が増す」ということと本質的には同じであると考えられる。

ここで、特に取り上げたいのは②の夫婦それ自体の関

係の変化についてである。子どもが思春期を迎える時、様々な形で家族からの分離を試みる。休日ともなると部活動、友人との買い物などで不在が多くなる。また、衣食住で母親の手を煩わせることも少なくなっていく。夫婦だけで過ごす時間が自然と多くなっていき、それまでは子どもを介して成り立っていた夫婦の会話を、子どもを介さない夫婦間の直接的会話に変えていかななくてはならない。

表6 夫婦関係の再編成を示唆する表現

子どものために夫婦間で協力する。	のべ人数
子どもの反抗に対して夫婦で一致団結する。	3
父親と母親の連絡が密になる。	3
夫婦で一緒に子どものことでおろおろする。	1
夫婦の間で子どもの進路について話す。	1
夫婦で子どもがいなくなった喪失感を分かちあう。	1
夫婦関係自体の見直し	
夫婦のみで行動することが多くなる。(買い物, テニス, 旅行, コンサート)	5
共通の趣味をもつ。(ダンス, 英語)	2
夫婦で老後のことについて話す。	1
夫婦で、子どもが大学入学後どのように過ごすか話題にする。	1

夫婦間でなされる会話は「(子どもに) ふられちゃったね」「いつかは私達と犬だけだね」など、子どもが居なくなる喪失感をわかち合うことから始まると言える。そして、子どもが思春期後期(高校生)ぐらいになると、子どもが家族から自立していった後のことを予測し、その準備に入るといことが見受けられた。「夫婦で共通の趣味、習い事をする」(2家族)「子ども抜きで旅行に行く」(5家族)など、より夫婦の結びつきを強くするための計画が練られたりする。以下に、事例をあげる。

(事例7) 家族構成：父親45才(会社員)
母親43才(病院パート)
長女17才(高校3年)
長男15才(中学3年)
次男12才(中学2年)

長女も長男も自分達の世界をもって、親から離れつつある。「勉強、勉強と押しつけてきたけれど、子どもがたまに自分の意見をきちんといったりすると、ああ成長したなと思う」というのが現在の母親の気持ちである。夫婦は最近老後の過ごし方について話すようになった。「子ども達はもう自分達でやっていくしかない。夫婦はこ

れから二人になる。そのための共通の話題が必要。」というのが母親の考えである。一年ぐらい前に手始めに英会話を二人で習い始めた。今は、ジムに通っている。今までは同じ目標について夫婦で話すことはなかったからお互いに新鮮だったとのことである。また、子ども達が離れて不安になったときで、タイミングもよかったと話していた。

この家族は、子どもが離れていくとき、並行して夫婦間の結びつきが強くなっていつている。不安をわかち合うため、また、今後の生活を考えて、家族の変化に対応していつているといえよう。

一方、潜伏していた夫婦の問題が、この時期に浮上してくることもある。

(事例8) 家族構成：父親51才(大学教員)
母親42才(主婦)
長女18才(高校3年)
長男16才(高校1年)

父親は、自分の世界を非常に大事にする人で、家に居るときでもほとんど口をきかない。酔った時しか自分の気持ちを表現しないという。長女は父親の仕事に興味をもっているが、父親は自分の仕事を覗かれるようでいやがる。母親は「父親の壁があまりに強いのでやりにくい。結婚以来いろいろ試みてきたけれど、この人は変わらないということがわかった。」といつている。長男は部活動で忙しく、長女は、自分で将来の計画をたてており、来年大学進学したら家を出ていく予定である。その後について母親は「夫婦2人になったらどうしていいかわからない。」と不安が隠せない様子である。

この場合、子育てを介して夫婦はどうか協力体制をつくってきたようである。しかし、子ども達が巣立とうとしていつるとき、母親は父親とコミュニケーションをとる術を知らず、困惑が大きいようである。

このようにこの時期夫婦で再び対峙し、その関係を見直す必要があると言える。J. M. Lewis & M. R. Beavers (1976) は健康な家族の条件の一つとして両親連合をあげた。家族のライフサイクルの視点から見ても、両親連合の強さは発達段階の課題をうまく乗り切れるかどうか強く影響していると考えられる。

C. 思春期の危機後の家族

これまで述べてきたように子どもが思春期を迎える時、家族に様々な変化が生じる。変化の渦中にある家族はまさに危機的な状況に陥るといえるであろう。しかし、面接調査の中で、その危機を乗り切った家族は新しい役割関係や権威構造のもとで、再び安定した状態に

戻ることが示唆された。これらは表7にまとめた。そのことを報告した家族は26家族(59.1%)あったが、そのうち24家族が第1子が高校生であった。思春期後半を迎える頃になると再び安定した状態になると考えられる。

表7 安定期の家族の状態を示唆する表現

子どもを自立した個人として認めていく。	のべ人数
親は、情報を子どもにいろいろと提供するが、決定に関しては本人に任せる。	3
子どもに無理な強制はしない。	2
子どもは子どもでやっていく。	2
子ども達の意見を尊重する。	1
子どもに干渉しない。	1
家族全員が対等な関係になる。	
人間同士の集まりとして対等である。	5
中心は家族全員であり、家族が輪になるような関係である。	2
母親はかばってくれる。	2
娘は母親より大人である。	1
子どもから『人間として』尊敬してもらうよう努力する。	1
家族でなにか決定する際、子どもの意見を取り入れる。	1
子どもに諭される。	1
母親の仕事の相談を子どもにのってもらおう。	1
それぞれが好きなように生活している。	1
家族が友愛的な関係で結ばれている。	
友人同士のような関係である。	8
家族でよく話をする。	4
仲間同士のような関係である。	3
精神的なつながりが重要になる。	2

危機後の家族の状態は、

- ①子どもを一個の自立した個人として認める。
- ②家族成員の立場が対等となる。
- ③家族内で、親密な友愛的関係(companionship)が高まる。

ということにまとめられる。

家族はそれまでの親が子どもを保護してきた(対等でない)関係から、家族成員のそれぞれの立場を尊重した成人同士の関係に変化を遂げていく。親としての権威を振りかざしたり、干渉するのではなく、時には子どもの意見を取り入れたたりすることも見受けられる。しかし、それは親が単に子どもの仲間として同じ立場に降りてつきあうということではなさそうである。家族が安定期に

入った多くの母親達は「両親の役割は、以前の物理的・直接的な養育から、精神的なつながり、すなわち『見守る』『応援する』という役割に変化する」といっている。

子どもとの関係は、「言葉」を媒介にする話し合いによって保たれていくようである。話し合いの中には「進路」「深刻な悩み」などの堅苦しいものから「テレビについてのおしゃべり」「その日の出来事」など、些細なものも多く含まれている。また、この時期の話し合いは一方的でなく相互的であることも特徴的である。例えば、母親の方から仕事について相談したりということもある。以下に、事例をあげる。

(事例9) 家族構成：父親49才(会社員)

母親41才(主婦)

長女17才(高校3年)

次女15才(高校1年)

長女が中学2、3年の時は反抗で大変だったが、高校生になってすっかり親離れしたという。母親にも「受験があっても(お母さんは)家にいなくても大丈夫。かえってそんなことされたら重荷だ。」とっており、母親も過干渉にならないように気をつけている。夫婦で旅行にいつでも留守宅を長女に任せられるようになった。また、母親が疲れて休んでいても以前は批判するだけだったのが手伝ってくれるようになった。夫婦間のことを相談しても、対等な立場で相談にのってくれる。父親は、まだ子ども達の成長を認識できず、子ども扱いする面もあるが、子ども達の方は父親の仕事に対しては理解を示すようになった。例えば、多少お酒を飲んで帰ってきて「責めたらかわいそうだ」と許せるようになった。母親は、現在の状態を指してよく話し合う家族だと言っている。以前はバラバラな時期もあったが、最近ではテレビ、映画などよく一緒にみて楽しんだり、母親も自分の初恋のことなどを話せるようになった。

この家族も3年程前には危機的な状況を経験している。しかし、長女が高校生になった頃から安定してきている。安定後の家族は、危機前の家族とは異なった構造となっている。それまで、親対子という構造から友人同士のようにまとまっている印象を受ける。家族の中では特定に連合はなく、家族成員は相互にバランスをとっていると見えるだろう。この家族のように落ちついた暖かい雰囲気満ちているのが安定期の特徴であると考えられる。

IV. まとめ

結果から、思春期の子どもをもつ家族が最終的に達成

すべき課題は「相互の自立, 相違を認めた上での友愛的関係である」といえる。その課題を達成するために, 家族共通の変化が見られることが示唆された。それらは 1.凝集性の緩和 2.権威構造の変化, 管理の緩和 3.父親の家族への参加 4.夫婦関係の再編成 とまとめることができる。

これらの結果は, E. A. Cater & M. McGoldrick (1980) の提示した青春期の子どもを持った家族の課題とは必ずしも一致しない。彼らは, この段階の家族の主要な原理として家族境界の拡大をあげている。しかし, なにが家族に安定をもたらすかは明示していない。たとえ家族境界の拡大に成功したとしても家族は孤立したり, まとまりがなくなる恐れがあると考えられる。一方, 岡堂(1980)は, 十代の子どもをもつ家族の危機は, 家族の内外で友愛性を育てる能力によって影響を受けると言っている。友愛性の獲得にあたっては, 親子間の妥協, 夫婦関係の刷新というように特に親の側に困難を引き起こすとも言っている。

以上のことから, 自立を前提にした友愛性の獲得を思春期の子どもをもつ家族の課題として取り上げるのは納得がいくことと考えられる。また, 今回の調査では, その課題を達成するにあたって, 家族の中で生じる具体的変化を提示できた。このことは臨床的にも意味があると言えるであろう。

また, 今回の調査のなかで, 「父親の家族への参加」が特に取り上げられた。思春期の子どもの変化に伴って, 父親の在り方の質的变化はその後の家族の変化の方向性を決めるにあたって, 重要な意味をもっていると言えるであろう。一方, 両親自身も, この時期, 中年期の課題を抱えている。今回の調査では触れることができなかったが, 父親として問われ直すことは, 自分自身のあり様にもう一度直面することになると想像できる。子どもの変化に加え, それらが共振を起こすとき, 家族は深刻な危機的な状況に陥ると考えられる。今回は, 家族ライフサイクルの中で特に思春期の子どもをもつ家族を取り上げるに留まった。しかし, 今後, 家族ライフサイクル全般にわたって, 各々の段階における変化の方向性, 課題について実証的な研究が必要となってくるだろう。それによって, 臨床の場面でも家族の問題を把握することが容易になると考えられる。

(指導教官 近藤邦夫助教授)

引用文献

- Family Therapy. The Family life Cycle : A Framework for Family Therapy ; Gardner Press New York 1980
- Erikson, E. H. : Childhood and Society. W. W. Norton. New York. 1950 (仁科 弥生訳『幼児期と社会』みすず書房 1977)
- Hudge. S. F, Berger, M. & Wright, L : The Family Life Cycle and Clinical Intervention. Journal of Marriage and Family Counseling 4.4. 1978
- 木谷秀勝・前田重治 : 「青年期における父性・母性の機能に関する一考察」九州大学教育学部紀要(教育心理部門)第31巻 第2号 p.115-124 1986
- Laing, R. D. & Esterson, A. : Sanity, Madness and The Family. Tavistock Publication. London 1964 (笠原 嘉・辻 和子訳『狂気と家族』みすず書房 1972)
- Lewis, J. M., Beavers, W. R. et al : No Single Thread-psychological health in family sysytems, Brunner/Mazel, New York 1976 (本多 裕, 国谷誠朗ほか訳『織りなす綾』国際図書出版)
- Minuchin, S. : Families & Family Therapy. Harverd University Press 1974 (山根常男監訳『家族と家族療法』誠心書房 1984)
- Minuchin, P. : Relationships within the family : a systems perspective on development. Relationships within families. Claredon Press Oxford 1988
- Olson, D. H. : Circumplex Model of Marital and Family systems I : Cohesion and Adaptability Dimensions, Family Types and Clinical Application. Family Process, vol.18 (no.1) p.3-28. 1979
- Stierlin, H. : A family perspective on adolescent runaways. Archives of General Psychiatry. 12, 56-62 1973
- 村瀬孝雄 : 「思春期の様相」『岩波講座精神の科学 6 ライフサイクル』岩波書店 p.141-180 1983
- 岡堂哲雄 : 「家族ダイナミクス—家族心理過程の諸段階」『講座異常心理学 3 思春期・青年期の異常心理』新曜社 p.68-80 1980
- 小此木啓吾 : 「家族ライフサイクルとパーソナリティ発達の病理」『講座家族精神医学 4』p.1-42 1982
- Cater, E. A. & McGoldrick, M. : The Family Life Cycle and